



ボランティア報告会賑やかに

第17回ボランティア活動報告会が6月13日、ボラセン傘下の28グループが参加して開催され、カレッジ構内は終日熱気に包まれました。ホールでは映像によるグループ活動の紹介のあと、大正琴や人形劇・フラ・マジック・合唱など12グループが舞台上でパフォーマンスを披露。ロビーでは花苗・クッキー・陶芸などの販売、書道・子ども文化などのパネル展示、木工などの作品展示が行われ、和室では茶会が、園芸室では紙漉き体験教室が開かれました。



静岡からカレッジ研修旅行に

大学女性協会静岡支部の一行11人が6月7～8日、研修旅行でカレッジを訪れ授業やサークルの練習風景を見学。「私たちと同じシルバー世代が、生き生きと勉学やボランティアに励んでいるのを見て勇気づけられた」と話していました。

7日午前には健福3年のグループ学習(写真)と音文の授業を参観。昼食は全員で学生食堂へ。午後はLL教室に移り、シルバーカレッジの概要(松島事務局長)、しあわせの村の概要(南本常務理事)、グループ〈わ〉のボランティア活動(南形広報担当)について、ビデオを見ながら説明を受けました。参加者からは市政の中での位置づけ・財政面・カリキュラムなどについて質問がありました。

午後は、巡回バスで村内を1周。緑に包まれた広大な敷地に各種の施設が点在する風景に眼を見張っていました。同夜はホテル棟で一泊。8日午前中も健福・生環・国際の授業を見学し「ごく短時間しか聴けなかったが、授業内容も思っていた以上にレベルが高く、皆さんの真剣な態度に感心した」と驚いた様子でした。同協会には72か国が加盟。各県に支部があり多文化共生事業や奉仕活動をしています。

学び、友情を育む新たな人生

大学女性協会静岡支部 勝又幸子

私たち大学女性協会静岡支部会員11名は6月7～8日の2日間、神戸市シルバーカレッジの視察としあわせの村を見学する貴重な機会をいただいた。参加した会員は50歳前半から70歳後半まで、個々のライフステージや関心の違いから視察する視点も異なっていたと思う。私は55歳で久しく会社勤めをしてきたが、最近子どもが成人し、自分の定年退職が現実味を帯びてきた世代で、その目線で視察させていただいた。

広大な敷地に多様な施設を配したしあわせの村をバスで一巡し、その設備の素晴らしさに、南欧にいるかのような錯覚さえ覚えたと同時に、自治体の財政難がつづく昨今、どうやってここを維持しているのだろうか、と興味もわいた。カレッジが求める学生像が「地域活動、ボランティア活動に理解と熱意をもつ方」とのことで、カルチャーセンターとは違う社会的意義がそこにあることを知った。グループ〈わ〉の活動についても、カレッジ卒業生による自発的な活動だと聞き、行政がおぜん立てする「生涯学習」とは違う、独立性と自発性が感じられた。

カレッジ入学者はコースによって男女比は異なるものの全体では6対4で男性の方が多いという事実に興味をもった。高齢になって元気に地域活動に参加するのはもっぱら女性というイメージが強かったからだ。伴侶を亡くした人をはじめとして「おひとり様」が多いとのことだが、カレッジに集い、あらたな人間関係を作っていくことは長寿社会を生きぬく者には必要なことだろう。

仕事の人間関係だけで生きてくると、肩書が無くなった時のことを不安に思うことがある。それは、家庭婦人としておなじことで、母として、妻として生きてきた人が独りになり、自分が何者であるかを自問自答する時がくる。そんなときに、年長の先輩たちの生きざまから学ぶところは大きだろう。学年という上下関係が、年齢や経験ではなく、カレッジでの学びの時間の長短だけによることも魅力だ。だれでも新たな人生のスタートを切ることができるのだ。学習だけでなく、クラブ活動で友情を育むことも可能だ。カレッジで学ぶ人々の生き生きとした表情から、そんなワクワクした気持ちも感じるとることができた。